

中国古典文学大系 43

平凡社

儒林外史

吳敬梓作 稻田孝 訳

訳者紹介

いなか たかし
稲田 孝 大正4年東京生。東京大学文学部卒（昭和15年）。専攻 中国文学。現職 東京学芸大学助教授。訳著書「新老子・列子物語」（河出書房）「中国故事物語」（河出書房） 現住所 東京都新宿区若松町128

中国古典文学大系 全60巻

儒林外史

第43巻

昭和43年10月5日 初版発行
昭和46年7月1日 3版発行

定価 1600 円

訳者との申
合せにより
検印を省略
いたします

訳者 稲田 孝
東京都千代田区四番町4番地
発行者 下 中 邦 彦

発行所 郵便番号 102
東京都千代田区
四番町4番地
振替・東京29639

株式会社 平 凡 社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
© 株式会社 平凡社 1968

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

0397-312431-7600

目次

主要人名表……………前付七

第一回……………三

楔子せきしを語って大意を述べ
名士を借りて全文をしめくくる

第二回……………四

王舉人おうきよじんが村の学校で同年の合格者を知り
周先生しゅうせいしんが晩年に上級の科第かだいに登る

第三回……………三

周學道しゅうがくどうが学生より真才を抜きんで
胡豚屋ことんやが凶行を演じて吉報をさわがす

第四回……………三

追善を仰せつかつて和尚わしやうが訴えられ
秋風あきふうを行なつて郷紳きやうしんが災難にあう

第五回……………四

王秀才わうしやうさいが妾を正妻にしようと思ひ
嚴監生げんかんせいが病んで寿を終える

第六回……………五

郷紳きやうしんが病んで船頭とひとさわぎし
寡婦かふがひどい仕打ちに兄を訴える

第七回……………六

范學道はんがくどうが試験官となつて恩師に報い
王員外わういんがひが朝に立つて友誼ゆうぎを尽くす

第八回……………七

王觀察わうかんさくが窮途で良き知合いに逢い
妻公子さいこうしが故里で貧しい者と交わる

第九回……………八

妻公子さいこうしが金を投じて朋友ほうゆうを贖あない
劉守備りゅうしゆへいが姓をいつわつて船頭を打つ

第十回 七

魯翰林が才を愛して婿に選び
蘧公孫が招かれて富家に入る

第十一回 一〇六

魯家の娘が八股文で新郎をこまらせ
楊教諭が大臣の府に賢士をすすめる

第十二回 一二五

名士が大いに驚胆湖に宴し
俠客がいつわりの生首会を設ける

第十三回 一三四

蘧駪夫が賢を求めて学業を問ひ
馬純上が義を行なつて財をうとんずる

第十四回 一三三

蘧公孫が書坊にて良友を送り
馬秀才が山洞にて神仙に遇ふ

第十五回 一四三

神仙を葬る馬秀才が喪を送り
父母を思ふ匡童生が孝をつくす

第十六回 一五〇

大柳庄にて孝行息子が親に仕え
桑清鼎にて賢き高官が士をいつくしむ

第十七回 一五九

匡秀才がふたたび旧地に遊び
趙医師が詩壇に高名をはせる

第十八回 一六七

詩会に名士が匡超人をさそひ
書店に朋友をたずねて潘三に会う

第十九回 一七五

匡超人が幸いにも良友をえ
潘自業が無残にも禍にあふ

第二十回 一八五

匡超人が長安道で楽しい目にあい
牛布衣が蕪湖関で客死する

第二十一回 一九三

若者が姓名をいつわつて名声を求め
老人が親戚を思つて病に臥す

第二十二回 二〇〇

玉圃が祖・孫と認めあつて一族となり
雪齋が交遊を愛して客をとどめる

第二十三回 二〇八

秘事をあばいて詩人が打たれ
老いを嘆じて寡婦が夫をたずねる

第二十四回 二七

牛浦郎が多くの裁判沙汰にかかりあい
鮑文卿が昔の生活をとりもどす

第二十五回 三五

鮑文卿が南京で旧友に会い
倪廷璽が安慶で花婿となる

第二十六回 三三

向知事が昇官して友を哭し
鮑廷璽が父を失って妻をめとる

第二十七回 三三

王太太が夫婦で反目し
鮑廷璽が兄弟あい逢う

第二十八回 三六

季葦蕭が揚州で花婿となり
蕭金鉉が白下で書を選する

第二十九回 三六

諸葛佑が僧寮で友に会い
杜慎卿が南京で姫をいれる

第三十回 三七

若き俊才を愛して友を神樂觀に訪ね
風流をほしいままにして莫愁湖にあい集う

第三十一回 三七

天長県にとともに豪傑を訪ね
賜書楼で良友がしたたかに酔う

第三十二回 二六

杜少卿が平素に豪傑の振舞いし
婁煥文が臨終に遺言する

第三十三回 二九

杜少卿が夫婦で山に遊び
遲衡山が朋友と礼を論じる

第三十四回 三〇

名士が礼楽を議するために友を訪ね
天子が弓旌を備えて賢を招く

第三十五回 三一

聖天子が賢を求めて道を問ひ
莊徵君が爵を辞して家に帰る

第三十六回 三〇

常熟県に真儒が生まれ
泰伯祠で名賢が祭をつかさどる

第三十七回 三六

先聖を南京に祭って礼を修め
孝子を西蜀に送って親をたずねしめる

第三十八回

郭孝子が深山で虎にあい
甘露僧が狭路で仇にあう

三六

第四十五回

友誼あつくして兄に代わって過を受け
墓所を講じて家に帰って親を葬う

三九

第三十九回

蕭雲仙が難を明月嶺に救い
平少保が青楓城に勝利をあげる

三六

第四十六回

三山門に賢人が別れをおし
五河県は金と権勢に首ったけ

四〇

第四十回

蕭雲仙が広武山で雪を賞し
沈瓊枝が利涉橋で文を売る

三三

第四十七回

虞秀才が元武廟を改修し
方塩商が節孝祠を賑わす

四二

第四十一回

莊濯江が昔を秦淮河になつかしみ
沈瓊枝が江都県に送りかえされる

三三

第四十八回

徽州府にて烈婦が夫に殉じ
泰伯祠にて遺賢が昔をしのぶ

四三

第四十二回

貴公子が妓院で科場を説き
家人が苗族の地から消息をもたらす

三二

第四十九回

翰林が竜虎榜を談論し
中書が鳳凰池に身分を騙る

四九

第四十三回

野羊塘で將軍が大いに戦い
歌舞の地に酋長が軍営をおかす

三七

第五十回

偽の官員が街頭に恥をさらし
真の義士が友人のため名を取り持つ

四六

第四十四回

湯鎮台が功を成しとげて故郷に帰り
余明経が酒の宴で葬事を問う

三七

第五十一回

少婦が人を騙って色事を仕損じ
壮士が興にまかせて官刑を試みる

四四

第五十二回		四五
-------	-------	----

武芸を比べて公子が身を傷つけ
広間を荒して英雄が貸しを催促する

第五十三回		四六〇
-------	-------	-----

国公府にて雪の夜に客を招き
来賓楼にて燈心が夢を驚かす

第五十四回		四六八
-------	-------	-----

病める佳人が青楼にて運命を占い
こけ名士が妓館にて詩を献ずる

第五十五回		四七八
-------	-------	-----

四客を添えて今昔の感を述べ
一曲を高山流水に弾じる

解 説		四八九
-----	-------	-----

参考付図(一)		卷末
---------	-------	----

参考付図(二)		卷末
---------	-------	----

儒^{じゆ}

林^{りん}

外^{がい}

史^し

稻^{いな} 吳^ご

田^だ 敬^{けい}

孝^{かう} 梓^し

訳 作

第一回

楔子（さしこ）を語って大意を述べ
名士を借りて全文をしめくくる

人の世は北に南に分れ路

將軍・宰相、はた神仙も

はじめはただの凡人なり

百代の興亡は朝また暮

江風は吹き倒す前代の樹

功名富貴ははかないものぞ

心情をつかいはたして

年月をむだにするばかり

濁酒（どろさけ）三杯よいしれよ

水流れ花落ちて行く先いずこ

この一首の歌、いつもながらの老書生の陳腐なきまり文句で、功名富貴は、そもそもがわが身中のものではない、といっているだけのこと。ところが世のひとびと、ひとたび功名富貴を眼前にすると、生命を投げ棄ててこれを追い求め、さて、手にしてみれば、その味は蠟をかむようなのである。古よりこのかた、いったいどれだけの人がこのことを見破ったであらうか？

とはいえ、かつて元朝の末のころ、並みはずれて磊落なひとりの人物があらわれた。姓は王、名は冕といい、浙江省紹興府諸暨県の片田舎の人。七歳の時、父親に死なれたが、母が針仕事をして、村の塾にあげてくれ、読み書きを習った。

またたくまに三年たって、十歳になった時、母が王冕を膝もとに呼びよせて、

「あのね、お母さんはおまえの勉強を好きこのんで邪魔だてするつもりはないんだけど、ただお父さんがなくなつたあと、お母さんはやめ暮し、出るほうばかりで、はいつて来るものはないし、おまけに年柄が悪くて、お米は高い。少しは残っていた古い着物や家の道具も、質草になるものはしたし、売れるものは売ってしまいました。お母さんが、よその家の針仕事をしてかせぐお錢だけでは、とてもおまえを学校へ通わせてはあげられないんだよ！ もう仕方がないから、おまえをお隣の家の牛番にでも使ってもらえないかと思つてね、毎月少しはお錢もいただけるだろうし、おまえのご飯も食べさせてもらえるだろうからね。明日にでも行つてみようじゃないの！」

「お話のとおりです、お母さん！ ぼく、学校に行つていても、ほんとは楽しくなかった。それより、お隣に行つて牛の番してるほうが、よっぽど愉快です。勉強しようと思つたら、いままでのように本を持つても行けるんだし」

その夜、ふたりは話をきめ、翌日、母が隣の秦家へ連れて行つた。秦老人は親子を引きとめて朝の食事をとらせると、一頭の水牛を引っぱつてきて王冕にわたし、門の外を指さしながら、

「すぐそこの表門から二、三百歩もいけば七瀬湖だ。湖の岸は一面の草で、どこの家の牛も、あそこで昼寝するんだよ。それに、ひとかかえもある大きなしだれ柳が何十本もあって、とても涼しいし、牛もの

どがかわけば、すぐ岸辺^{きしべ}でのめる。坊はその近くでだけ遊んで、遠くに行つてはいけないよ。この爺^{じい}さんは、毎日二度のご飯とお菜はかかさぬようにする。そして毎朝、二錢ほどお錢^{あし}をあげるからお菓子を買つて食べな。まあ、なにごとにつけ怠^{なま}けずに一生懸命やることだね！」

母がご馳走^{ちしう}になった礼を言つて帰るのを、王冕は門まで見送つた。

母は王冕の着物をなおしてやりながら、

「おまえ、よく氣をつけて、ひとさまから悪く言われることのないようにね！ 朝は早く出かけ、夕方は遅く帰つてくるようにして、お母さんに心配させないでちょうだい」

王冕はうなずいた。母は眼に涙をためて帰つて行つた。こうして王冕の秦家での牛の番が始まつた。王冕は毎日黄昏^{たふし}時になつて家に帰り、母と床につくのだった。

たまたま秦家で塩漬^{しほづけ}けの魚や肉を煮て王冕に食べさせたりすると、王冕は蓮^{はす}の葉につつんで持つて帰り、母にすすめた。また、毎日の菓子代は使わずに、一、二ヵ月分をためると暇をぬすんで村塾へ行き、学校廻りの本屋が来ていれば、古本を少し買ひ入れてきて、毎日牛をつないでおいで、柳のこかげで読むのだった。

三、四年がまたたく間にすぎた。王冕は読書のおかげで、よく物事がわかるようになった。

ある日、ちょうど梅雨^{つゆ}時のことで、むしむしする天気だった。牛番に疲れた王冕が、草の上に腰をおろしていると、しばらくして濃い雲がたれこめ、ひどい俄雨^{ふたふた}が通りすぎた。やがて黒雲のへりに白い雲がかがやいて、しだいに散つていき、その割れ間から一条の日の光がもれ、湖一面を真っ赤に照らし出した。湖辺の山々は、あるものは青く、あるものは紫に、またあるものは緑色をしている。樹の枝は水に洗わ

れたあとそのままに、ことのほか美しい緑だった。湖上に十本ばかりの蓮^{はす}の花があつて、花苞^{かほう}を水がすべり落ち、葉の上には水玉がコロコロころがっている。

王冕はしばらく眺めながら考えた。

『人は絵の中にいる』とは昔のひとの言葉だが、全くそのとおりだ。しかし、残念ながらここにはひとりの画家もいない。この蓮の何本かを絵に描いたら、さぞかし面白からうに！」

さらにまた考えた。

「世の中に学んでできないことはない。……そうだ、ぼくが自分で描けばいいじゃないか！」

とそんなことを考えている時、遠くに人足の姿が見えた。岡持^{おかもち}をかつき、酒瓶^{しうびん}をぶらさげ、岡持の上には毛氈^{もうぜん}がかけてある。柳の下まで来ると、その毛氈を敷き、岡持をあげた。そのあとからやつて来た三人の人物は、みな頭に方巾^{ほうきん}（読書人のかぶる角頭巾）をのせ、ひとりには群青^{ぐんせい}色の薄絹^{うすきぬ}のあわせの直裰^{ちよく}（僧衣^{そうい}のように大袖^{おほそで}で、前でえりをあわせる普段^{ふだん}着、道袍^{どうほう}ともいう）、あとのおたりは黒い直裰を着、年のころは四、五十の見当、白い紙扇^{かみゆき}を動かしながら、ゆったりと歩いてきた。群青色の直裰の人物は太つていて、木の下までやつて来ると、ひげをはやした黒い直裰の男に上席をすすめ、もうひとりの瘦せている男には、ひげの男と向い合せに坐らせた。太っちょが主人なのだろう、下座について酒をついだ。

しばらく飲み食いしていたが、やがて太っちょが口をひらいて、
「危^{あや}先生がおもどりになつて、新たに住いを手に入れたが、それが京師^{きやうし}の鐘樓街^{しやうろうかい}にあつたお宅より、ぐっと大きくて、値段が銀二千両。持主は、この先生がお買ひになるんなら自分のほまれになるのだからと、三、四十両もまけて売つたんです。先月の十日に引越しなさつ

て、その時、府知事様や県知事様までが、ご自身でお祝いに出席かれ、真夜中まで飲んでいかれました。街の者だれもが、そりや尊敬申し上げていたのでして」

瘦せたのが言った。

「県知事殿は壬午の年の挙人で危先生の門下生、当然お祝いに来られるはずだ」

するとまた太つちやが、

「私の娘の舅も危先生の門下生で、今、河南で県知事をしています。一昨日婿が来まして、鹿の乾肉を二斤土産にもらいました。この皿のがそれなんです。今度、婿が帰りましたら、あちらの父に一筆書いてもらいまして、私、危先生の所へご機嫌うかがいにまいります。そしてもし危先生がこの田舎まで返礼に来てくださいましたら、もうこちらの田舎の奴めらに、驢馬や豚を私らの畑に放されて作物を食いあらされずにすみませうがなあ！」

「しかし、危先生は学者というべきでしょう！」

と瘦せたのが言った。するとひげが、

「先日、危先生が京師をご出発の時、今上陛下が御みずから城外までお見送りになり、手をとって十数歩もお歩きになったということですよ。危先生はいくともいくとも最敬礼されてから、やっと轎にお乗りになったのですと。してみると、近く大役にお就きになるんではないでしょうか？」

三人は、ああだ、こうだと、いつ果てるともなくしゃべりあっている。王冕は日も暮れかかったので、牛を引いて帰った。

王冕は以後、ためた金は本を買わずに、人にたのんで県城から臙脂や白粉などの絵具を買ってきてもらい、蓮の花を描く勉強をはじめた。はじめはよく描けなかったが、三ヵ月もつづけていると、花の心ばえ

といい、姿といい、実物と寸分たがわず、もし画紙が目にはいらなければ、それは全く湖面に咲いた蓮であつたし、また湖面から摘んできたばかりの花を紙にはりつけたようでもあつた。村の人たちはよく描けているのを見て、金を持ってきて買うものもいた。金がいると、王冕はあれこれと好きそうなものを買ってきて母を喜ばせた。

話はつきからつきに伝わって、諸暨県じゅうに花の水彩画の名手であることが知れわたり、ひとびとが争って買いにやってくるようになった。十七、八歳のころには、王冕はもう秦家をやめて、毎日絵を幾枚か描き、古人の詩文を勉強し、次第に衣食の心配もなくなつて、母親も喜んでいた。

この王冕、生来が聰明で、二十歳にもならないのに、天文や地理から、經書・史書の大学問にいたるまで、ひとつとして通曉しないものはないありさま。ただ性情が俗と同じでなく、官爵も求めなければ、朋友ともつきあわず、終日門戸を閉ざして読書している。また、「楚辞の図」に出ている屈原（戦国時代の大詩人、「楚辞」はその詩集）の衣冠を見て、自分もべらぼうにたけ長の帽子とダブダブの衣服を作った。ちょうど花が咲き柳が芽ぶく季節で、王冕は水牛の車に母を乗せ、自分はその背高帽子をかぶり、ダブダブの服を着け、鞭を手にして、歌曲を口ずさみながら、村や町や、湖のあたりまで、そこらじゅうを遊び廻った。それに目をとめた村の子供たちが三々五々群れをなして牛車のあとにくっついてきて笑うのだったが、王冕はいつも平気だった。

ところで、隣の秦老人は、百姓ではあつたが、なかなか見識のある人で、王冕の幼いころから、その生長ぶりを見ていて、いかにも並みの人間でないのを見抜き、王冕を尊敬し、かわいがり、いつも親しく付き合ひ、自分の草屋にまねいてゆつくり話しあうのだった。



王冕が水牛の車に母をのせて遊び廻っている図

「このかたが王殿？ ではあの花の絵がお上手な？」

「そうですよ、どうしてご存じなのかな？」

と秦老人。翟が、

「県の者なら誰だつて知ってるね。先日、県知事様から二十四幅の花弁の画帖を上司にお贈りしい、ついでに用達をおまえにまかせる、とお言付けがあったのだ。わしは王殿のご高名を聞いておったから、それでこちらのお父さんの所へすつとんで来たというわけさ。ご縁があったんだよ、今日こうして王殿にお会いできたなんて！ もちろん絵はお骨折り願えますね。半月ほどしたら、いただきますにまいります。知事様のことだから、揮毫料として銀数両がとこはまちがいなし、その時そっくりお渡ししますよ」

秦老人もかたわらからしきりにすすめる。王冕は秦老人の気持を無にできず、やむなく承諾したのだった。

家に帰ると、王冕は心をうちこんで二十四幅の花の絵を描きあげ、どの絵にも詩を題した。

翟は帰って知事に報告し、知事の時仁は二十四両の銀を支払った。翟は十二両さしひいて、のこりの十二両だけを持参して王冕に渡し、画帖を受け取って帰って行った。

時知事はほかにも幾品かの土産物をととのえて危素におくり、訪問の進物とした。それらを受け取ると、危素は画帖ばかりを眺めている。眺めては、また眺め、手をおくにしのびぬといった気に入るよう。

ある日、ちやうどふたりが話しこんでいる時、外からはいつて来た人がある。瓦楞帽（頂が蛤型でたてにひだのはいった庶民の帽子）をかぶり、木綿の青い服を着ていた。このひとは翟といつて、諸暨県の役所の下役取締りであり、物品仕入係でもあった。秦老人の上の子が、このひとの名義の子になっていて、父と呼んでいた。だから翟は田舎へ来ると、いつも秦の家によつた。秦老人はいそいで息子に茶をいれさせ、鶏を殺し肉を煮て歓待し、王冕にも相伴してもらった。

おたがいに姓名を告げあうと、翟が、

つぎの日、危素はお礼のために酒席を設け、時県知事を招待した。時候の挨拶もすみ、酒も数巡したところ、危素が言った。

「昨日、知事殿からいただいた花の絵は、古人のものでしょうか、それとも今の人のものでしょうか？」

知事はかくさずに、

「あれは、私の県下の村の農民で、王冕と申すものなのですが、年もまだ若く、ちよいと絵のまねごとをやりだしたばかりで、とても先生のおめがねにはかないますまい」

すると危素は嘆息して、

「私は郷里を長いこと離れていましたので、こんな賢才がわが故郷にいたとはついぞ知りませなんだ。お恥ずかしい次第です。この御仁は才が高いばかりでなく、胸中の見識も非凡、いずれは名も地位もわれわれの下にあるような人物ではないでしょう。知事殿、いかがでしょう、その王冕を呼んで引き合わせていただけませんか？」

「それはおやすいことです。おいとましましたら、さっそく使いをやって呼んでこさせます。危先生のお氣に召したと聞けば、もちろん望外の喜びでしょうからな」

そう言つて、危素のもとを辞し、役所へもどつてくると、時知事は翟下役頭に鄭重な招待状を持たせて王冕を迎えにやつた。翟下役頭は村へ飛んできて秦老人の家をたずね、王冕を呼んで、いちぶしじゅうを話した。王冕は笑つて、

「お頭さん、ご足労かけますが、知事様にご返事申し上げてください。王冕は一介の百姓ですから、お近付き願おうとは存じません。このご招待状もちやうだいいたしかねます」

翟は顔色を変えた。

「知事様が招待状をよこしてお招きなさつてゐるのに、出かけぬ人があ

るかね！ しかも、こいつはもともとわしがおまえさんをひいきにしてあげたからじゃないか！ でなけりや、おまえさんに花の絵が描けることなど知事様がご存じになるものか。理屈からいや、知事様にお会いできるんだつて、わしに重々感謝してしかるべきなんだ。だのに、せつかく駆けつけてきても、茶の一杯も出してももらえぬどころか、ごたくをならべ、お目にかかりに行こうともしないとは、なんたる道理だね！ 帰つて知事様になんにご返事すればいいんだ！ 知事様は一

県の主だ、百姓いっぴきくらい、どうにだつてできなさるんだぞ！」

「お頭さん、あなたはおわかりになつてないんです。私がなにかしてかして、知事様から呼出し状がきたというんでしたら、行かぬわけにはいきません。でも今は招待状でお招きをいただいているので、なにも私に無理強いなさるお氣持ではありません。私がおうかがいしたくないんですから、知事様もご承知なさいますよ」

「おまえ、そりやなんのことだい。呼出し状がくれば行くが、招待状で招かれたんでは行かないなんて！ それじゃ、せつかくのご好意がわからんというものだ！」

すると秦老人がすすめて、

「王冕君、まあいいじゃないか、知事様が招待状でお招きなんだ、言わずとされたご好意だよ。お頭のおともをして行つておいで！ 昔から、『家門をほろぼす県知事』といわれてるほどだ。知事様といさかしてなんになるね」

「おじさん、お頭さんはご存じないが、おじさんにはお話ししたことがあるじゃないですか、段干木と泄柳の故事ですよ。私は行きたくありません」

すると翟が、

「おまえさん、難題をふきかけるねえ！ わしはどう知事様に申し上

げりゃいいんだい？」

秦老人が言った。

「サテ、サテ、こいつは両難じゃ！ 行けといえ、晁君が承知せず、行かぬとなれば、お頭が返事に難儀する。ヨシ、ヨシ、わしによい方法がある。お頭はお役所に帰っても、晁君が承知しなかったと言わないうで、いま家で思おもっているから、すぐには来れない、二、三日のうちに好くなれば、やって来る、と言うんだ」

「病氣なら、隣近所の保証状が必要だ」

と翟が言った。

こんな口論をやったのち、秦老人は晩飯を支度して翟に食べさせ、またこっそり王冕を母親のところへやり、三銭二分の銀を用意させ、翟に足代としてつかませた。それで翟はやっと承知して立ち去り、知事へ返事したのである。

知事はひそかに考えた。

「あの小倅こがしが、病氣になんぞなるはずがない！ きつと翟のやつ、田舎へ行くと虎の威をかる狐になりおって、ひどくおどしつけたのだらう。これまで役所の人間には会ったこともない奴らだらうから、恐ろしくて来られないのだ。危素先生からあいつのことを頼まれた以上、連れてうかがえぬとなると、わしは先生からグズな奴と嘲笑されるにきまっている。ことはわしがじきじき村へ行って会うのがなにより。あいつの顔をたててやり、断じていじめるつもりのないことを見せてやれば、おのずと胆いもふとくなくて、わしに会いに来るであらう。そうしたらさっそく先生のお宅へ連れて行く、これが事をなすに敏というものだ……」

だがまたこうも思った。

「堂々たる一個の県知事が、身分もかえりみず、一介の百姓ふぜいを

こちらから訪ねたとあつては、役所の奴らの笑い草になる……」

だがまた思いかえて、

「先生の先日の口ぶりでは、大変な尊敬のなされかたであった。先生が十分の敬意をお払いになるとあれば、わしは百分の敬意を払ってしかるべきであらう。ましてや、身分をかえりみずに賢をうやまうのだ、将来史書にも載って称賛されることはうたがいない。これこそ千古不滅のおこない、ぐずぐずしている法はない！」

かくして即座に腹をきめた。

次の朝、輜かろ夫ふどもをそろえ、行列の儀仗ぎじやうは用いずに供奉くふの者八人だけをとない、翟下役頭が付き添って、まっすぐ村へやって来た。銅鑼どろのひびきを聞きつけた村人たちは、みな老人をたすけ子供を連れ、ひしめきあつて見物した。輜が王冕の門口にたどりつく。見ると、七八間ほどの草屋には、白木のひらき戸がビツタリしめられていた。翟が駆けよつてあわだしく門をたたく。しばらくたたいてみると、中から婆ばあさんが、杖つゑをつきながら出てきて、

「いま家におりませんよ！ 朝早く水牛に水を飲ませに出て行ったきりまだ帰ってこないんですよ」

「知事様がご自身でおまえさんの息子にお話ししてみえたのに、なにをモソモソ言ってるんだ！ 早くどこへ行ったか教えないか、わしが知らせに行ってくる！」

「ほんとに家にはいないし、どこへ行ったんだかも知らないんですよ！」

婆さんはそう言うとき、門をしめて中に消えた。そうこうしているうちに知事の輜が来てしまった。翟は輜の前にひざまずいて報告した。

「王冕にお出でを申し伝えようとしたところ、家にはおりませぬ。お輜をお宿までかえされて、しばらくお休みくださいますよう。もう

一度、私めが申し伝えにまいります」

翟は轎につきそいながら王冕の家の裏手に出た。そこは幾条もの狭い畔道が入り乱れ、遠方には大きな池、池のふちには榆や桑やがいちめに植わっている。池のあたりはひろびろとした田地がひらけ、さらに一つ山があった。それほど高くはなかったが、青々とした樹木におおわれている。せいぜい一里（中国の一里は約六百メートル、以下本書中の里はすべて中国の里）ばかり、呼べば答える距離である。

知事の轎が進んで行くと、ちょうど遠くに牧童の姿が見えた。水牛の背に後ろむきに乗って山のはしをまわってやって来る。翟は大急ぎで近づいて、

「秦の次男坊、隣の王の兄哥はどこで牛に水のましてるか知らないかね？」

「王の兄哥かい？ 二十里むこうの王家集の親戚へ酒のみに行ったよ。この牛は兄哥のさ。家に連れて行ってくれて頼まれたんだ」

翟がこのことを知事に伝えると、知事は顔色を変えて、

「そういうことなら、宿へ行くまでもない！ 即刻役所に引きかえせ！」

知事はいまや腹の底から怒った。本来ならばすぐにでも役人に王冕を捕えさせて、こらしめるところだが、しかし、危先生に乱暴なことをすると言われるかもしれない。ひとまず腹の虫をおさえて引きかえし、いずれ危先生に、取り立ててやるに当たらない人物であることを説明して、それから始末しても遅くはあるまい、と考えて、知事は帰って行った。

王冕は、実はそう遠くに行っていたのではない。ほどなく家へもどって来た。秦老人が駆けつけて、うらみごとを言う。

「おまえさんは今日もまたひどい意地の張りようだねえ！ あのかた

は一県の主だよ、どうしてそうないがしろにするんだねえ！」

「おじさん、お坐りください、お話ししたいことがあります。時知事は、危素の権勢をかさにきて、この平民たちを、そりゃひどいやり方で虐めております。こんな人間と、私はなぜ付き合わねばならんですか！ でも今度もどれば、きっと危素に話をします。危素は、恥ずかしさの余り怒りだし、かならずや私に言いがかりをつけるでしょう。私はこれからおじさんとお別れし、荷物をまとめて、どこかにしばらく身をかくします。ただ母を家に残していくのが気がかりなんです」

すると母親が、

「あのね、おまえが長い年月、詩や絵を売ったお金を、母さんも四、五十両はためてあるから、食べていくのに心配はありません。年とはとったが、それでも悪いところはないし、おまえは安心してしばらくかくれてるがいいよ。それに、おまえは罪をおかしたわけじゃないんだから、まさかお上がやって来て、おまえの母さんを捕えることはするまいさ！」

秦老人が、

「それも道理だ。それにおまえさんが、この村に埋もれていたんじや、学問や才能があったって、誰も認めてくれやせん。ここで広い世間へ出て行けば、あるいはそんなひとにひょっこり会えないともかぎらないよ。お母さんのことはどんなことだっていっさいこの年寄が引き受けた、おまえさんに代わってお世話するよ」

王冕は秦老人に礼を述べた。秦老人はいちど自分の家へ引きかえすと、酒や肴を運んで来て王冕のために送別を行ない、夜中まで飲んで帰って行った。

つぎの日の五更（午前三時～五時）に、王冕は起きだして荷物をとと